

## 令和7年度学校評価報告書

学校名(廿日市市立宮園小学校)

| 評価計画                 |   |  |   |     | 自己評価     |          |          |    |   | 学校運営協議会<br>委員評価コメント  | 改善方策   |
|----------------------|---|--|---|-----|----------|----------|----------|----|---|--|--|
| 中期経営目標<br>(めざす児童生徒像) | 短期経営目標<br>(めざす児童生徒像)                                | 目標達成のための方策   | 評価項目・指標   | 目標  | 中間<br>8月 | 最終<br>2月 | 達成       | 評価 | 結果と課題の分析  |  |  |
| 確かな学力                | ○基礎・基本の<br>定着・活用<br><br>◎主体的に課題<br>解決に取り組む<br>態度の育成 | ・特性や進度等に<br>応じた学習(自由<br>進度学習)                        | ・自ら進んで学習に取り<br>組む児童の割合(アンケート)   | 95% | 95%      | 93%      | 97%      | B  | ・導入して6年目を迎えた自由<br>進度学習の成果が出ている。一<br>方、学習内容が難しかったり、<br>生活習慣が定着してなかったり<br>して、意欲の低下がみられる児<br>童がいる。   | 自由進度学習の成果<br>もあり、児童は楽し<br>そうに学び、主体的<br>に学ぼうとする意識<br>が高まっている。教<br>師の教材研究が大切<br>であり、自己努力が<br>必要である。学習意<br>欲の低下については<br>小規模校なのできめ<br>細かな取組が可能な<br>のではないかと。<br>生活習慣については<br>保護者としっかり連<br>携し、低学年のうち<br>からきちんと指導を<br>することも必要であ<br>る。                 | ・教材研究や児童理解にPD<br>CAのサイクルを取り入れ、<br>より児童の実態に即した学び<br>ができるようにする。<br><br>・考え方や求め方を言葉や式、<br>図を用いて説明する活動を取り<br>入れる。算数科では、答え<br>のみを求める学習だけでなく<br>「なぜそのように考えたの<br>か」を説明する場面を設ける。<br><br>・今後は、児童一人一人が「自<br>分で考えた」「自分で決めて行<br>動した」と実感できる学習場<br>面をより意図的に設定するな<br>どして、引き続き、主体性の<br>育成を図っていく必要がある。  |
|                      |   | ・知識を活用・発揮<br>する協働的な学び<br>の実践                         | ・廿日市市学力定着状況<br>調査における思考判断表<br>現の目標値を達成する児<br>童の割合                                 | 75% | —        | 71%      | 94%      | B  | ・国語は概ね目標に近い結果<br>であったが、算数では正答率<br>が低い傾向が見られ、特に記<br>述式の解答形式の問題におい<br>て正答率が下がる傾向が見ら<br>れた。これは、問題の意図を<br>読み取り、自分の考えを整理<br>して表現する力が十分に定着<br>していないことが要因と考え<br>られる。 |  |  |
|                      |   | ・興味関心に応じ<br>た課題に取り組む<br>機会の設定(個人<br>探究学習・自主学<br>習等)  | ・課題の解決に向けて、<br>自分で考え自分から取り<br>組む児童の割合(全国学<br>力・学習状況調査児童質<br>問紙及びアンケート)【市共通<br>項目】 | 85% | 99%      | —        | 116<br>% | A  | ・結果から、児童が学習の中<br>で、課題を自分事としてとら<br>え、自ら考え、主体的に学ぼう<br>とする意識が学校全体とし<br>て高まっていることがうかが<br>える。  |  |  |
| 豊かな心                 | ○規範意識・相<br>手意識の醸成<br><br>◎自己有用感の<br>向上・他者理解<br>の促進  | ・相手や場に応じ<br>た挨拶・言葉遣い<br>の指導の徹底                       | ・「自分から進んであいさ<br>つできる」児童の割合(ク<br>エーン)  | 95% | 92%      | 91%      | 96%      | B  | ・中間評価からわずか達成度<br>は下がった。ほとんどの児童<br>が挨拶をしているが、個人差<br>が大きい。また、保護者の評<br>価が80%であり、児童の評価<br>と10%以上の差がある。挨拶<br>の返し方、先生以外の方への<br>挨拶を意識していく必要がある。                      | 地域では自分から<br>挨拶をする児童、声<br>をかけると受け答え<br>できている児童が<br>大半である。あい<br>さつ名人の評価を<br>継続して挨拶がで<br>きることも一つの<br>能力であると捉え<br>て継続した指導を<br>お願いしたい。<br>役に立っている場<br>面に会ったら「あ<br>りがとう」の声かけ<br>を積極的に行うと<br>いいのではないかと。<br>縦割り班活動を学<br>校生活の多様な場<br>面に取り入れてみ<br>てはどうか。 | ・あいさつ名人を継続的に行<br>っているが、毎回同じ児童が<br>選ばれていることが多い。表<br>彰の見方を見直したり、良い<br>挨拶モデルを示したりする必<br>要がある。また、日々の挨拶<br>に号令や感謝の言葉も含まれ<br>ることなど、指導していくこ<br>とも大切である。どんな挨拶<br>があるのか、挨拶をされたと<br>きにどんな返し方ができるか<br>など、具体的に考えさせなけ<br>ればならない。<br><br>・掃除、給食当番、係活動な<br>ど、役に立っている場面に<br>会ったら、すぐに肯定的な評<br>価をしていくことが大切であ<br>る。学級のいいところ見つけ<br>などを継続的に作り、自己肯<br>定感をあげていくようにして<br>いきたい。 |
|                      |   | ・多様な他者と協<br>働する活動の場づ<br>くり(いいところ<br>見つけ・縦割り班<br>活動等) | ・「自分はクラスの人や友<br>だちの役に立っている」<br>肯定的評価の児童の割合<br>【小中共同項目】(アンケート)                     | 90% | 89%      | 88%      | 98%      | B  | ・中間評価からわずか達成度<br>が下がった。低学年は「役に<br>立つ」という意味が理解でき<br>ていない可能性がある。また、<br>どんな場面で役に立っている<br>というのが具体的にイメージ<br>しにくいのではないかと考え<br>られる。                                  |  |  |

|            |                     |                                   |  |     |     |     |      |   |   |  |  |
|------------|---------------------|-----------------------------------|--|-----|-----|-----|------|---|---|--|--|
| 健やかな体      | ○生活・健康に関する自己管理能力の育成 | ・「安全・安心」「チャレンジ・自己実現」を基盤とした生活習慣の確立 | ・「スマホやタブレット、ゲームなどのメディアを家庭のルールを守って正しく使っている」という保護者の割合（アンケート） | 80% | 92% | 79% | 98%  | B | ・おはね目標は達成できたが、中間評価時と比べると達成度はやや下がった。これは、保護者にルール例や利用のめやすを周知したことで、家庭における基準が高まったためではないかと考えられる。    | 保護者とメディアのルールについて意識共有が進んだことはよい。子どもたちがルールを決めるなどの工夫をしながら決めたルールを守ることの徹底が必要。情報モラルについて「安全・安心」を確保するためにも計画的に行ってもらいたい。中学校でも課題があるので、小中意識をそろえて取り組んでいく必要がある。運動場で楽しく遊ぶ児童の姿があり、体力づくりの推進となっている。異学年交流、縦割り交流によって、体を動かすことの心地よさ、楽しさ、おもしろさを実感させる工夫に取り組んでほしい。 | ・来年度は、年度当初に保健だより等を活用し、メディア利用の目安や家庭でのルールについて周知する。また、懇談会や学年通信などを通して時期を定め、情報モラルに関する啓発を行う。併せて、児童に対しては情報モラル教育をカリキュラムに位置付け、計画的に指導していく。 |
|            | ○体力づくりの推進           | ・運動に親しむ時間と場の設定（ロング昼休憩・朝遊び）        | ・「体を動かすことが好き」という児童の割合（アンケート）                               | 90% | 93% | 90% | 100% | A | ・朝遊びの推奨や異学年交流の機会を設定したことにより、児童が楽しく外で遊ぶ姿が多く見られ、目標は達成できた。  | ・縦割りでの交流は引き続き行うとともに、ペア学年で遊ぶ機会も設け、遊びのレベルをそろえることで運動量の確保を図る。また、体育委員会を中心に外遊びを推奨し、一緒に遊ぶよう声かけを行った。長期休業中には綱跳びカードなど家庭でも取り組める活動を設定したりする。さらに、球技以外にも輪車や昔遊びを取り組めるよう、体力推進リーダーを中心に環境の整備を進める。   |  |
| 信頼される学校づくり | ○働きがい改革の推進          | ・日課、行事、活動の見直し及び精選                 | ・子どもと向き合う時間が確保されていると考える教職員の割合【市共通項目】（アンケート）                | 95% | 92% | 93% | 98%  | B | ・会議の行い方を工夫して会議時間を短縮し、教材研究や分掌の仕事の時間を確保した。今年度も各学期視察週間を設け、約470名の視察者を迎えた。教職員は視察に柔軟に対応している。        | 忙しい業務の中でも教職員がやりがいを感じているのはすばらしい。「学校あつての地域、地域あつての学校」をいう考えを基本に今後も学校の教育活動の中にとっかかりと地域を取り込んでほしい。地域のことを知ることが、地域の人との交流が、児童がふるさとへの愛着を抱くことに大きく影響する。そういった取組の中から地域へ貢献しようとする意識の醸成が図られていくと思う。  | ・日々忙しいが、教職員は仕事のやりがいや働きやすさを感じている。教職員の心理的安全性が高まるよう引き続き環境づくりに努める。   |
|            | ○ふるさとに愛着をもつ児童の育成    | ・地域学習の充実                          | ・「地域のために自分ができたいと思う」という児童の割合（アンケート）                         | 70% | 92% | 90% | 128% | A | ・地域の諸団体との連携を密に図り、学習支援をしていただき、交流もすることができた。生活科、総合的な学習の時間における地域学習においては、地域へ貢献しようとする意識づけも行うことができた。 | ・生活科・総合的な学習の時間における地域学習では、地域を知ること、よさを実感させること、最終的に地域のために自分は何ができるのか考えることができるように、各学年の成果と課題を整理し、単元内容の工夫、改善を行う。  |  |

※ 「評価」の項目については、「達成度」は「報告期の数値／目標値」である。

「目標値」に対する「達成度」をA～Dで評価する。（A:100% B:80%以上 C:60%以上 D:60%未満）

「不登校児童生徒が〇人以内」等逆転項目の評価については、2～4段階で評価できるよう学校で定める。

※ 達成度の度合いから、評価項目・評価指標・目標値が適切であったかという視点でも見直し、目標値の修正や指標の変更・追加があってもよい。

※ 計画書・中間報告書に上書きしてもよい。

※ 参考資料があれば添付すること。